

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

News Letter

第10号

2011年3月25日発行



写真：健康教育を見学するスタディツアー参加者



ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

スタディツアー

ISAPHでは、ラオスの医療事情を知ってもらうため、聖マリア病院の職員の方々に対象に活動地域を訪問する等のスタディツアーを毎年行っております。今回は、平成22年12月7日(火)～12日(日)で、聖マリア病院の職員5名、聖マリア学院職員1名、保健医療経営大学の職員1名、計7名の方々が参加されました。

聖マリア病院新生児センター保育士 島田 美穂

平成22年12月7～12日の日程で参加させていただいたスタディツアーは、私にとって国際支援活動の現場を視察する初めての体験となりました。見るもの聞くものすべてがカルチャーショックの連続でした。

市場では肉や魚が保冷されず売られており、感染症や寄生虫が問題に。私たちが視察したシーブンファン地区の住環境は、高床式木造の簡素な家で、家畜である豚やニワトリが放し飼いされており、至る所に糞尿が散乱。飲み水の井戸には大腸菌。保清の習慣もなく、手洗い、沐浴も不十分なため、皮膚病の原因となっていました。

一番ショックだったのは、独特な食習慣による健康被害でした。授乳を行う大切な時期の母親が、塩とおかゆしか食べられなかったり、生後間もない乳児はモッカオ（餅米を咀嚼して蒸したもの）を食べさせられるため、便秘や窒息が問題視されていたり、母乳を飲ませると赤ちゃんが下痢になり死んでしまうと信じられていたり。未だ古い習慣・迷信が根強く残っていました。

ISAPHの活動を見学して一番印象的だったのは、ドクター自ら行われている健康指導で、一方的な指導で

はなく、コミュニケーションを取りながら対話を中心とした住民参加型の指導が行われていることでした。母乳栄養の大切さ、保清の重要性、母子の栄養教育など、全て図式化され分かりやすく説明されていました。

住民とスタッフの間には確固たる信頼関係が築かれ、スタッフの献身的な努力が実を結び、健康教育に対する住民の理解度は80%と確実に成果を上げ、ISAPHの活動が浸透していることが分かりました。日本では常識として浸透していて、当たり前だと思っていた環境は、とてもありがたいもので、本当に恵まれた国に生まれ育ったことは、感謝すべきことなのだと改めて思い返す機会となり、国際協力への関心も益々高まった研修でした。このような機会を与えていただき、貴重な体験をさせていただいたことに本当に感謝しています。



現地スタッフとツアー参加者

聖マリア病院臨床工学室 中田 正悟

今回、平成22年12月7日～12日のISAPHラオス国スタディツアーに参加させていただきました。ISAPHの活動する村では、昔からの風習で妊婦は塩と餅米しか食べてはいけないなどの食物タブーや、母親が農作業をする際に、子どもを泣かせないために母乳ではなく腹持ちのよい餅米を柔らかくした物を食べさせることが現在も行われています。母親が子どもに母乳を飲ませるという当たり前と思っていたことが、国によって風習がここまで違うものなのかと驚かされました。

一方、私は臨床工学技士という立場からラオスでのME機器（医療工学機器）の現状を中心に病院の見学をしました。郡病院ではME機器と呼べるものは皆無でしたが、国や県の病院では人工呼吸器等多数のME機器がありました。現在、ME機器管理に関しては専門の技術スタッフの存在はなく、大半はルクセンブルクのボランティアに委託しているという状態でした。今回の見学で最もショッキングだったのは、日本のODA（政府開発援助）から供与された人工呼吸器が一度も使用されずに放置されていたということです。こ

れは供与された人工呼吸器回路が使い捨ての製品であり、現地ではそれが手に入らなかったためです。ICUの医師は「支援はありがたいが、その後の消耗品の供給なども視野に入れてほしい」と残念そうにおっしゃっていました。この点、単にME機器を支援するだけでなく、相手国の現状を視野に入れた支援でないと無意味だと感じました。

今後、支援国に頼っているME機器管理について、専門の技術部門を設立し技術者の育成を行っていくという病院もあるそうで、そのような活動への参加の機会があれば是非協力させていただきたいと考えます。

最後になりますが、引率していただいた浦部先生をはじめ国際事業部、ISAPH現地スタッフの皆様に深く感謝いたします。



現地スタッフの皆さんと

今回、平成22年12月7日～12日の6日間、ISAPHのスタディツアーに参加させていただきました。私は理学療法士として病院で業務を行っています。今回参加する前まで、日本の理学療法士の視点がラオス国の病院で何か役にたつのではないかと考えていました。しかし、現地に実際に行ってみて、視線を向けるべきは病院ではなく、退院後の生活の場である地域や村ではないかと感じました。ラオスでは、保険制度が整っておらず医療費がかかることや、設備が整っている大きな病院に行くには通院費がかかるため経済的に家族の負担は大きくなります。また、たとえ病院に行ったとしても、理学療法士の人数は需要に足りていません。地域における医療介入を行うためにはどのような疾患の人がどの程度いるのかという情報を収集し、地域の特性を考えなければならないと思いました。

写真は村の一般的な民家です。この梯子は、健康な人は難なく登れますが、身体に不自由がある人には困難だと思います。これについて現地で活動を行っているスタッフに聞くと「身体に不自由がある人をあまり見ることはない」のだそうで、「障害者を人に見せてはいけない」という考えがラオス国にもあるそうです。現地の文化・習慣などを考慮しつつ、身体に不自由が

ある人でも外に出られるような環境を作って行かなければいけないと感じました。

また、今回見学したISAPHの活動の中でも考えさせられることがありました。それは村での栄養・授乳指導の時です。ある家族は、現地スタッフの再三の指導も聞き入れず、授乳を拒否しており、家族の決まり事や習慣が活動に大きく影響しているのを感じました。

現地へ行くことで国際協力とは物資や技術の援助だけではないこと、現地の文化・特性・倫理的なことを理解し行動することの重要さや大変さを学ぶことができました。今回、現場で実感できたことで、理学療法士としての視野が広がったと感じました。このような機会を与えて下さった関係者の方々に感謝の言葉を述べたいと思います。



シーブンファン地区の一般的な民家

私は今まで国際協力ということに興味はあったが、自分の人生においては非現実的すぎて、現実的なイメージとしてとらえることができませんでした。しかし「できることは何でもやってみればいい」という看護師長の一言が、私の気持ちを後押ししてくれて、実際にスタディツアーに参加する運びとなりました。

病院訪問では、多くのカルチャーショックを体験すると同時に、日本とラオスのそれぞれの国における医療・病院環境の素晴らしい点を知ることができました。また、過酷な勤務のなかでも懸命に働いているのは、ラオスも日本も同じで、医療従事者が体を酷使している現状を知りました。

シーブンファン地区では、初乳を捨ててしまうという習慣が、本当に衝撃的でした。さらに妊産婦のフードタブーといった習慣も、私の常識からはかけ離れているものでした。実際に乳児にもち米を食べさせていたり、コンデンスミルクをお湯で溶かしたりするなど、栄養失調の乳児を見て、とても複雑な気持ちになりました。また、活動中には、母乳のせいで子どもが死んでしまったという思い込みから、母乳をやることに家族が反対している場面もありました。

ISAPHのみなさんのそんな根強く残る風習や伝統の

中で、懸命に活動している姿が印象的であり、他国の人の事を自分のことのように一生懸命考えて、悩んでいる姿に本当に感動しました。また、実感したのが、ラオスの人の温かさです。私達の訪問を皆さんとても歓迎してくれるとともに、日本人に対してとても感謝をしていました。それはきっと、今まで多くの日本人が、ラオスの人々に真摯に接してきたからではないかと思います。そして、自分も日本人であることが、とても誇らしかったです。

今回の参加者はそれぞれ違う職種で、考え方がさまざまで、それがとても刺激になりました。実際に参加するまでに、時間がかかってしまいましたが、参加して挑戦することの大切さや、目標達成のための努力、日本人であることの誇りなど、得る物がとても大きく、参加できたことにとても感謝しています。



保健活動に参加して、身長測定の補助をさせていただきました



ラオスからの報告

ISAPH ラオス事務所長 **高畑 恒雄**

ISAPH ラオス事務所長として平成23年2月10日(木)に着任しました高畑恒雄です。これまで着実な活動を行ってきたISAPH事業に関わることができることを、大変嬉しく思っております。

今回は3回目のラオス滞在です。最初は青年海外協力隊員として1972年～74年でした。2回目は1996年にJICA事務所を立ち上げにきました。こうして3回も同じ国で働く機会に出会えたのは、やはりこの国の人々と何かの縁があるのだろーと感じます。保健分野は私にとって馴染みが薄い領域ですが、これまでの経験を生かして、別な視点も加えて村を元気にする方法を考えて行きたいと思っています。1972年当時はインドシナ戦争の末期で国内は殺伐としておりました。タケークは激戦地でしたし、橋がないこともあって遠い別の国のように思っていました。今は戦争を知らない世代が街を闊歩していて、とても明るく平和な雰囲気です。世知辛い日本から来るとほっとするのは私だけではないと思います。

さて、ISAPHの活動地区はここタケークから40km程南に下ったセバンファイ郡の3地区です。こ

こには主要民族であるラーオのほかに、少数民族も入り混じっており、それぞれに異なった文化的背景に加えて、古くからの定住者、それほど古くない人々、自給できている人々、土地を持たない貧しい人々、それぞれに暮らしています。共通していることは、間違った因習に囚われて健康を害す人が少なくないことです。特に妊婦や、授乳期の母親の食事が制限されることが、結果として乳幼児の栄養状態を悪くしています。ISAPHは妊産婦・母子の健康をチェックしながら、問題を抱えた人々へのビタミン剤の提供、粉ミルクの配布を行い、中期的には健康教育を通じた地域の人々の健康増進を図っていきます。

まだ私自身が問題点を理解し切れていませんが、少しでもラオスの人々の生活向上に貢献できるように、励んでいきたいと考えております。皆様のご支援をよろしくお願い致します。



保健大臣と共に

ISAPH ラオス **藤倉 友**

ISAPH ラオスでの経験

平成22年は、ラオス南部の世界遺産であるワットプーからの初日の出を拝し、素晴らしい1年のスタートを切りました。初めてのラオス国内旅行では、この国の新たな魅力を発見し、さらにラオスに魅せられる結果となりました。

ISAPH ラオスでの勤務を通して、国全体の医療状況は向上しているものの、農村部においてはまだまだ追いついていないことを知り、実際に悲しい場面に立ち会ったこともありました。特に、出産後に母親が急死してしまったケースは深く心に刻まれています。もともと彼女にリスクはあったものの、どうして死ななければならなかったのか、いまさら悔やんでも仕方ないことと分かっているけど、残された家族のことを思うと悔しくて仕方がありません。唯一の救いは、命をかけて産んだ娘のワッサナーちゃんが順調に育っていることです。一時は誰かに引き取ってもらおうという話も出ましたが、ISAPHの寄付金から粉ミルク代を支援することで、父親と祖父母のもとで愛情を受けながらすくすくと成長しています。このような体験からも、

母子の健康のための活動が必須であることを痛感しています。ラオスで尊重されてきた昔からの習慣を変えることは容易ではありませんが、根気強く、また、さまざまなアプローチを駆使して伝え続けていく必要があります。その点からもISAPHの活動はとても有意義であると感じています。

お母さんたちや子どもたちの笑顔は私にとって何よりの原動力であり、彼らに直接触れ合うことができる点は草の根レベルでの活動の醍醐味でありました。この度、ラオスを離れることになりましたが、今後もお力になれるよう精進してまいります。どうもありがとうございました。



ワットプーからの初日の出

聖マリア医学会研究会に参加して

ISAPH ラオス事務所 岩田 和子

平成23年1月29日(土)に聖マリア学院大学で行われた聖マリア医学会研究会に参加しました。

シンポジウムのテーマは「国際看護協力の実績を踏まえて～中南米・アジア・アフリカの報告と今後～」で、3人のシンポジストのうちの1人としてISAPHの活動を通じラオスで実施してきたことなどを発表しました。私の他には、聖マリア学院大学の小川正子先生から中南米の看護教育プロジェクトを中心に周辺国同士の看護人材育成のための協調について、同じく聖マリア学院大学の秦野環先生からはアジアやアフリカの女性が置かれている状況について発表がありました。当たり前のことですが、国や民族ごとの様々な習慣によって看護教育の位置づけや女性の立場や役割が大きく違うことに目から鱗の思いでした。

このシンポジウムには国際看護協力に興味を持つ聖マリア病院職員、聖マリア学院大学の学生や職員の皆さんが集まり、各シンポジストは時間いっぱいまで自



質問に答える岩田氏（中央）

らの経験や活動や課題について伝え、質疑応答でも各国の看護や医療の状況、男女の役割について語りました。今回の発表を通じ、関係者をはじめ、より多くの方々にラオスやISAPHの活動について知ってもらうことができたと同時に、私が訪れたことのない国でどのようなことが起こっているのか知ることでもでき、大変よい機会を与えていただいたことに厚くお礼を申し上げます。

また、私は貴重な経験させてもらっており、それを効果的に分かりやすく、多くの人に伝えなければならぬということの責任の重さについても改めて痛感しました。

ラオスのナショナルスタッフ紹介 ISAPH ラオス サイヤシン・コンサワット



はじめまして、私は医師のサイヤシン・コンサワットです。ニックネームはトゥイです。ラオス北部のルアンパバーン県出身です。

私は1998年にビエンチャンの医科大学を卒業しました。卒業後は国立マホソット病院のボランティア職員として救急外科に勤務した後、様々な外国からの援助団体で働いてきました。

現在はISAPHラオス事務所のアシスタントプロジェクトマネージャーとして、プロジェクトマネージャーの補佐、ラオス側カウンターパートとの調整やラオス人職員の業務指導、活動対象地域での健康教育実施などといった業務を担当しています。ここでの仕事は、週末に通学している大学院で学んでいる公衆衛生マネジメントと合致する点も多く、とても有意義です。カムアン県セバンファイ郡の人々の健康向上の一部を担っているISAPHで働けることをとても嬉しく思っています。



アイサイクルプロジェクト

ISAPH 事務局

平成23年2月9日にペットボトルキャップの収益金、8,100円を寄付いただきました。ありがとうございました。ラオスの母子のビタミンB1購入のために使用させていただきます。

JICA 草の根事業のプロジェクトマネージャー交代のお知らせ

ISAPH 事務局

平成23年1月1日付で、草の根事業のプロジェクトマネージャの交代がありました。これまでの岩田和子職員に代わり、昨年8月より派遣中の椋清美職員が新プロジェクトマネージャーになりました。

最近のできごと

2011年11月～3月

12月
7日～10日

聖マリア病院職員及び関係者を対象
とした「ラオス国スタディツアー」
8名受け入れ

12月25日

日本とラオスの国交樹立55周年を
祝うイベント出展

1月7日

青年海外協力隊4名シーブンプアン
活動見学受け入れ

1月29日

第61回聖マリア医学会研究会のシ
ンポジウムにて岩田職員が「ラオス
における国際看護協力活動」につい
て発表

2月4日

青年海外協力隊9名シーブンプアン
活動見学受け入れ

3月
9日～10日

ラオス母子保健プロジェクトにて年
長者への健康教育実施のための研修
開催

3月
15日～16日

名古屋大学大学
院環境学研究科
よりISAPH活
動地区視察受け
入れ



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるた
めに、一人でも多くのご入会、
ご寄付をお待ちしております。

法人会員

入会金：30,000円 年会費：30,000円

一般会員

入会金：3,000円 年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、
当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH 東京事務所

〒105-0004

東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階

TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail tokyojimusho@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

東京事務所案内図



【ISAPH ニュースレター 第10号 編集スタッフ】

楨村さおり／磯東一郎／中野博行

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理事	湯川 武	早稲田大学研究院教授
理事	樋口 敬記	梓設計九州支社特別顧問
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
監事	竹之下義弘	弁護士（東京六本木法律事務所）

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院 Ver.5.0)

- 総合周産期母子医療センター (NICU・MFICU)
- 福岡県救命救急センター
- 地域医療支援病院
- がん診療連携拠点病院
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院

- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 日韓医療技術協力指定病院
- 自動車事故対策機構療護施設
- ISO 15189 認定施設
- 福岡県肝炎専門医療機関

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力を頂いています。